



Be fearless ~伝統と共に煌めく未来へ~

走姿顕心（そうしけんしん）

皆さんが11月19日開催のマラソン大会に向けて、体育の時間に長距離走の練習に励んでいる姿を目にしますが、一生懸命に走っている様子は、「走姿顕心」という言葉を想起させ、その人の真面目さ、真摯さ、一生懸命さを感じ大変素晴らしいと思います。

単純な動作の中にこそ、その人の内面や思っていることが現れやすいのだと思います。

人生はマラソンに例えられます。長い人生は楽しいことばかりでなく、苦しいことや悩むこともあり、長い距離を走ることとで感じる辛さに共通する面があるからですし、最後まで走りきることが生きることとつながります。人それぞれ能力や資質が異なり、順位を競うことより自分なりに精一杯走ること、生きることが重要です。

マラソンでは、最後まで走りきることと、順位であり、記録であり何か目標を決めて走ることとも重要です。人生を生きる中で、生きることと同時に、自分なりの目標、夢、志の実現に向けての努力が大事です。目標や夢、志の実現は簡単にいくとは限らず、実現の過程では辛いことや苦しいこともあるでしょう。その時に、マラソンの練習を通して、辛さ・苦しさに耐える疑似体験をして、頑張れる意志を、根性を育むと考えて取り組むこともいいかもしれません。

皆さんの頑張りは大変尊いものです。未来への貯金、財産になります。

自分の最善を尽くす

2026年の大河ドラマは「豊臣兄弟！」です。主人公は弟の秀長ですが、農民から天下人にまでなった秀吉は弟の存在が大きかったとは言え、素晴らしい能力・才能・運を持っていたと推察しますが、下の内容にも大いにうなずけるものがあります。

松下幸之助 「一日一話」より

太閤秀吉という人は、ぞうり取りになれば日本一のぞうりとりになったし、炭番になれば最高の能率を上げる炭番になった。そして馬回り役になったら、自分の月給をさいてニンジンを買ひ、馬にやったという。このため嫁さんが逃げてしまったということだが、そこに秀吉の偉大さがある。馬番になったが「オレはこんな仕事はいやだ」などと言わずに、日本一の馬番になろうと努力した。

つまり、いかなる環境にあっても、自分の最善を尽くし、一日一日を充実させ、それを積み重ねていく。それが役に立つ人間であり、そのようなことが人を成功に導いていく道だと思うのである。

置かれた状況の中で、不平不満を言わず、その状況で持ち得る目標を決めて最善を尽くす。

なかなか難しいですが、「置かれた場所で咲きなさい」というタイトルの渡辺和子さんの著書を思い浮かべます。

裏面に続く

思いを言葉にする力を付ける。そして、言葉を大切に丁寧に使う。

スマホにおけるラインアプリは大変便利で、素早く言葉やスタンプでやりとりができます。クイックレスポンスと言って、瞬時に返信することが意義あることで重要と考えている向きもあります。

しかし相手とのコミュニケーション、意思疎通で大事なことは早さではなく、相手に自分の思いや考えが正確に伝わっているかです。ラインによるメッセージのやりとりでも、たわいのない会話であれば、早さが面と向かって対話しているようなリアル感を感じさせる場合もあるでしょう。しかし、不用意に使った言葉が誤解を招き、それをきっかけに関係がギクシャクする原因になることも往々にしてあります。

また通信言葉は、短い上に感情的色合いが強くなる場合があります、大きく盛り上げたり逆に、相手の気持ちを逆なでしたりする危険もはらんでいます。

さらに、深くお互いの思いや考えを理解したいと思えば、言葉を尽くして語ることが不可欠です。その際、複雑な思いや、様々な感情が交じり合った微妙な心の様子は、短い単純な表現では表し切れませんし、思いの核心が伝わりません。

だからこそ、読書を通して語彙(ごい)や表現を学び、文章にする力を養いましょう。

「行く言葉が美しければ、
来る言葉も美しい。」

上の言葉は、韓国のことわざで、自分が優しく、美しい言葉をつかえば、相手からも同様の言葉が戻ってくるという意味。

一つの言葉（作者不詳）
一つの言葉でけんかして、
一つの言葉で仲直り。
一つの言葉で頭が下がり、
一つの言葉で笑い合い、
一つの言葉で泣かされる。
一つの言葉はそれぞれに、
一つの心をもっている。
きれいな言葉はきれいな心、
優しい言葉は優しい心。
一つの言葉を大切に、
一つの言葉を美しく。

心を育み、脳を活性化する読書

「シャングリラ」は、チベット語で「順調で意のままになりますように」、「天国に最も近い場所」という意味だそうです。小説を読み終わってみて、このタイトルが付けられた意味がわかる内容です。人は変わらない日常の中にいると成長がゆっくりした感じをもちますが、何か差し迫った危機を感じる状況に置かれると急激に成長を促される、そんなことを思います。



『滅びの前のシャングリラ』 尻良ゆう 著 中公文庫

小惑星が地球に衝突して地球が消滅するという前提での物語です。高校生の男女とその親が中心になって話は進みます。その中で、つくりあげられた歌姫の話も重なり、つながっていきます。あまりに過激、刺激的で好悪が分かれる内容です。絶望を前にした人の心理や、極限での思考回路がどう働くのか多くのことを考えさせられます。